

の粘橋を盤にかゝり、三界唯關を見損じ、心外無間の穴へ挾しを、毒蛇の口網をもて辟ぞあいな
みや、有無の中基に至りては、諸方實目に見まはし、崩限の終焉、目まざれに惑ては、過去塵點の劫
のたて替なく、外にむかつて助言を求左右に著して宮仕小性の目せゝして、小蓋の抑を握り、着
を捺に手爲見禁の扱をもき、いれず、あなや生死の點におどろき十廿卅棒の目算に跨ある時
は善惡不二の幹をくらはし、涅槃ともに斷をいれ、直指人身の掌に隱濱をしては、見生上手の品
をあらはし、修多羅の基經は、徒目さす指のごとし、八萬諸勝負の奥の手も一目不切、基聖別傳、不
立凡石、只あらまほしきは本來の待石を見立、不行不來の征を悟、盤中乾坤の夢石を直し、有漏の
消地をさゝむよりは、事理持基にうちなし、檜栢のばんじを放下して、無念無生の線香を杖につ
き、非空の心庵にかへり、基勢不可得の定石を見つけ、羸輸の境を離れ、鷺鳥の間に居らば、無無無
無と斐こそおかしけれ、

〔運歩色葉集〕定石 著

〔圍碁式〕先手事

初番の先手をひとしくあらむにをいては、むねとの人、若は先達にはうたせずしていそぎすべ
し、所ををく義なり、聖目に可打、さけてをくは様々しくてけまじき也、次の手は心にまかすべし、
先の手をば中、聖目に打入べくやとおぼゆ、其故は中に打つればかさをうたる、中の池をとられ
ず、四丁不被懸、又我爲には此等の事に皆便ある也、但是はこのみによるべきにこそ、
〔源氏物語〕五十三くるしきまでもながめさせ給ふかな、御碁うたせ給へといふ、いとあやしうこ
そはありしかとはのたまへど、うたんとおぼしたれば、ばんとりにやりて、我はと思て、せん、せさ
せてまつりたるに、いとこよなければ、またてなをしてうつ、

〔倭訓栞〕前編十三せん○中

圍碁にいふは先の字音、先手をいへり、唐書朱全忠先手、通鑑正誤